

金沢文庫存続の意義

— 中世に於ける教養活動の背景について —

佐藤 和夫

序

中世に於ける前期封建制下にある支配関係の中で、経済活動、文化活動の拠点として大きな存在であり、働をなした寺院及びその附屬機関（内包されるものであるが独自の機能をもつものを含む）は、その発展と継続維持のために、当業者の努力と熱意は勿論のことであるが、その背景にかなりの強大な政治権力、経済力の保護と援助によって經營されていたのであり、かゝる点に独力で自立できる一部の大社寺を除いては大部分がそれら助力者をはなれては存続できなかつたのであり、鎌倉、室町時代の文化の発展と伝播等活動の向題点があるものと考えられる。

何故ならば、それは私塾寺院として発足してきた事に根ざしている。

結城陸郎博士は次のように適切に説明されている。^註即ち

「中世の在地土壌は従来の無学文育の域を脱して、文化的向上を来すと共に、積極的に文化的、教育的活動を盛にしたが、その中心は自己の庇護に依つて設立された寺院であり、寺院をして、宗教的教化活動の中心とすると共に、自己及び子弟を中心とした教育場たらしめた。

こうして国内には全国到る所に教化的、教育的の中心ができたが、寺院文庫の成立もかゝる趨勢の現れと云えるが、それは自ら寺院としての公的な性格と、檀越との関係に於ける私的な面

があり、公私未分の形をとりつていた。」

中世文化史上、家系史上等にとりあげられ、問題にされる金沢文庫及び密接な関係をもつ存在である称名寺の消長はかゝる中世文化の問題を解明するための代表的なバロメーターといふことができる。

一

金沢文庫の實體の向原はともかく、存続を断頭するためには、先づ金沢氏の私建寺院として発足した称名寺の問題をとりあげなければならぬ。

称名寺に關する銅文は数多あり、すでにその内容に明らかになされているが、一室圓準に於て述べると、その創立年代は、正嘉元年より弘長二年（一一五八—一二六二）であつて、草創の頃には不詳な點をおいていたが、弘長二年に泰東西大寺觀尊の開闢下向によつて、その教化を受け真言律に改宗した。

即ち、永四年（一二六七）飯倉權兼寺住持良親

房悪性の斡旋により、野州業師寺の律僧妙性房審海を林々岡山として迎え、その宗旨を同じくして真言律と改め今日に至つたのである。

その後二代長老劍阿、三代長老湛庵と三代にわたる礎を築き迎えて発展してゆく。

いざおい、その序統も真言律としてのそれであつたろうが、実際には八宗兼修と云えるものであつて、その典籍も広い範圍にわたつてゐる。

称名寺は永承、北条興時が金沢に別業をおき、すずこに邸宅を建て、次に書庫を設けてこれを後に金沢文庫と称するが、更に一内の菩提寺として称名寺を創立したものであり、邸宅が主であり、文庫と称名寺は附屬物で従の關係にすぎなかつたのである。

しかし、金沢文庫を調査する際には、金沢氏、文章、称名寺の三者が密接な關係をもつことを先づ考慮しなければならぬことは、例外なく金沢文庫研究者の指摘しているところである。

それでは、金沢文庫と称名寺、金沢氏の關係はいかなるものか。更にこれらの關係はたがいにい

かなる相関々係を有しているだろうか、文化史的に求めた場合いかなる意義を有するかを定めて受なければならぬ。

金沢文庫については、すでに内苑博士の大きな業績が受けられ、近來平泉遷博士によって主張されていた「應永館蔵書」としての金沢文庫を、文化史的価値あるものとして従来の説を大巾に修正されより明確に「金沢文庫」としての価値の再認識しを我々に提示された。

しかし博士自身も認められているようにまた金沢文庫の正確な姿については多く判り加れない問題を残している。一例が金沢文庫本と称名寺文庫本等から考えられる文庫の概念である。

戦後から近年に至る結城陸部博士による一庫の研究はかような従来の研究の矛盾に對する鋭い批判であり着々とその成果を蓄積されて等泉に発表されている。

それによると金沢文庫現蔵の蔵書の分類から「金沢文庫本」なるものの実数が必ずしも世間に想像されているよりも多いものでないことを指摘さ

北、^{金澤}興休としては「称名寺文庫本」たるべきものであつて「金沢文庫」興休としての活動の実際は一般に知られていないようなものでなく「称名寺」が汗點の興休であろう、と規定されて、今までの金沢文庫に対する通念を別な視角から詳細に解明して打破せられたことは大きな功績と云わねばならない。

では金沢文庫が利用された範圍というのはごくせすいものであつたにもかゝらず、過大評価されているのは何故か、といつことについて、結城博士は

「無学文庫とされた武家によつて設立されたと理解されたことと、その他の事情に資う所が少なくないであらうが、就中大きな条件は称名寺の宗教活動であり、「金沢学校」の存在でなければならぬと考へるのである。

結論的に云へば、これがすなわち、いわゆる金沢文庫と混淆され、興休として把握され易い文庫に同化されるに至つたものであらう——後略」

と説明しておられる。

「金沢学校」は林名寺を中心として関東の特に上総、下総を軸とする諸寺院にてしばしば審海、鮎阿、湛庵の三代にわたり談義を興いたところからどう休せられるものであるが、これは後に融れる文化の地方伝播という大きな意義をもつものである。

鎌倉大草紙に

「武州金沢の学校は北条九代の繁昌のむかし学校ありし旧跡也云々」

「増広註
和音外」唐柳先生集」奥書

「正和元年十一月九日武金沢文学校近江人事
聰達行三十三」

同書「附録」尾

「正和元年九月廿七日於武州六浦金沢学校書写
畢 但中御懸十三遭追可書江州實人破納聰達行三
誌之」

この史料から「金沢学校」と称せられるものが正和元年に存したことが知られ、かなり有名であ

ったと思われる。この金沢学校が金沢文庫と混同されて「かくて金沢文庫を学校の附屬図書館的存在として規定するよりも、金沢学校をして林名寺文庫を含むものとして把握すべきであろう」とされる。

しかし、結城博士の見解は主に蔵書の分析から金沢文庫の存在、機能を解明しようとしたのであり教育史的側面から研究せられたので、全般的な中世文化上の面から考えた場合、実体はさうであつたとしても、名目的にせよ存在したこと、その存在の由つて求る時代性の意義がどのようなものであつたかといふことは別な視角からも論せられる問題であり、文庫の内容も更に豊富な史料によつて実証してゆかねばならない。

註

1. 結城陸郎氏「金沢文庫に関する一考察」史海
3、一九五六

2. 関靖氏「金沢文庫の研究」

舟越康寺氏「金沢林名寺及領の研究」樽浜市

立大学紀要、一九五一

萩野三七郎氏「鎌倉時代における文化の地方伝播」早稲田大学大学院文学研究科紀要4、

一九五八

小笠原長和氏「武州金沢村名寺と房總の諸寺」

千葉大学文理学部紀要

結城陸郎氏「金沢文庫と足利孝枝」

3. 記録に表れるのは「伝法灌頂雜要鈔」に「正

嘉二年四月十三日於武蔵国倉城郡六連庄内金

沢村、點越後守平興兩堂麻伝之」とあるのが

初見で「向東往還記」弘長二年二月二十七日

条に

「マ吉鎌倉下幾有一寺、号称名寺、年来雖置

不斷念仏衆、已令停止畢。」とあり、称名寺

の寺号と念仏寺として存在したことが知られ

る。

4 小笠原氏前掲書四二ページ

萩野博士前掲書

なお金沢文庫本は圖書、漢籍、仏典その他に

大別される。

5 金沢氏別業設置については從來安易に考へら

れてきたきらいがあるが、もと政治的要素

を重視する必要があるように思う。何故なら

金沢氏所領の本領とも云うべき六浦庄は武蔵

国久良岐郡に属するが地形上屯しる相模国鎌

倉郡に属すべき便宜さがある。

まず、吉野鏡正治元年二月六日幕政所吉書

始「武蔵国海月郡事」が頼家將軍就任におい

てとりあげられているが「海月郡」は久良岐

郡のことであり、内容については不明ながら

六浦を含めての重大事であつたと思われる。

何故大事であつたか。云うまでもなく六浦が

海上交通の要地であつたからであり、特に房

總方面とを結ぶ最短距離であつた。現在に入

海も大分陸地になつてしまつてゐるが古國等

によるとかなり入海が入り込んでおり金利谷

辺迄内海であつたことがわかる。鎌倉まで約

ハキロ程度の近距離にあり、鎌倉にとつては

重要な所であつたと思われる。であるから將

軍家の正系の手でこの地を掌握しようとして

いることはそれなりに根拠があることであり、
実泰が兄泰時から与えられ代々金沢氏として
本地をおいたことはこのような点に理由があ
ると思われる。泰時の頃には六浦庄が北条氏
のものであり、実泰の本領は金沢で釜利谷に
邸宅があつたものと思われる。

鎌倉の龜ヶ谷にも邸宅があり後目の郡台上
鎌倉に住む方が多かつたかと思われる。

二に鎌倉、六浦を直結する道路建設は従来
鎌倉、逗子、葉山、衣笠という房総に至るコ
ースは三浦氏の手にまわられていたが、これ
より一せう有利な道路を築こうとする竜岡の
あわわれであり、このような点からも軍事制
に重要な所領であり一族の金沢氏をこの地に
おけたことは重要な意味をもつ。

6 金沢文庫が完全な機能を発揮したかどうか関
博士自身も多くの矛盾を感じて補正されてい
る。「金沢文庫と金沢学校」

7 結城博士「蔵書より見たる金沢文庫」 国史
談話会雑誌第三号、東京大学文学部、昭和三

三、十一、

8、この結城博士の説に対しては石川謙博士「日
本学校史の研究」でも同じ見解を示されてい
る。

二、

いずれにしても金沢文庫活動は金沢文庫、金沢
校、称名寺を含めて活動の中心は称名寺であり
称名寺の僧侶達であつた。かゝる僧侶達は金沢文
庫に關する活動の中心としてとらえられるだけ
なく、中世文化の担い手であつたのであり、僧侶
の動向を具體的にとりえる事が金沢文庫の精神、
社会経済的背景を把握する一つのポイントであり、
精神的活動及びその背景についてはかなり具體化
されているが僧侶の経済活動については未だ研究
の余地があり、今後にまたねばならない。

それでは称名寺と金沢氏の關係についてみると、
善提寺として発足したのであるから、私建寺院と
して規定されるわけであるが、称名寺は「中世中

級寺社領の「支配」^{（一）}として把握される。当時の寺社は例外なくなんらかの形で権力者と密接な関係を有するものであるが、鎌倉寺にも金沢氏という権威の存在が大きくその運命を支配し、更に金沢文庫消滅に及ぶのである。

金沢文庫消滅の原因として内的条件と外的条件という二つが考えられるが、外的条件とは金沢氏の滅亡即ち鎌倉寺の政治的、経済的力の衰亡であり、内的条件として次の三点が指摘されている。

それによれば

一、足利学校が快元をはじめ九華、三聖など一世の碩学を後継者に得たのに対して、金沢学校にあつては湛庵の没後、世にしも後継者にその人を得たといふ得ないことが挙げられる。

二、足利学校在聖廟を中心とした学校形態に発展したが、金沢文庫は教育方法たるや伝授、口伝が重要な形態であるがそれは又、道場たるの性格に規定されたものであり、なおその教育理念が伝法相承にあり、僧侶養成を目的としたワケの中にとじこもる反時代的、伝統的、肉鎖的

性格を多分に保持していた。

三、足利学校における教育内容は、次第に外典を重んじ、ことに「周易」を中心として卜筮を主要内容とし、生徒また出でては武家の軍陣に参ずるといふ現実の武家社会の要求に即応するの現実主義的色彩を濃化していったのに対し、内典が中心であり、しかも古代的であつた。

以上の三点が内的条件の主なものとして挙げられる。しかしかゝる条件を克服し得たとしても（例えば足利学校の如く）外的条件との結合がうまくゆかなければ存続し得ないのである。

金沢文庫と比較される足利学校は、永享年間（一四二九—一四四〇）に上杉憲実の関与によって学校として活躍をはじめたが、その起源は応永にさかのぼるとされる。

室町幕府の管領として関東の奥樞を掌握しその所領足利荘に学校を設け、鑓阿寺という一時は憲実によって十五万石の寺領を有するに至つた。経済力を有する寺院の管理によって存続したのであ

り、内的条件として、前述の如く次第に独自の發展をとけるわけである。

9. 舟越康寿博士前掲書

拙稿「称名寺領の規定について」金沢文庫硏究七―五にも私見を述べておいた。

10. 結城博士「教育史上よりみたる金沢文庫」東京大学研究報告第十集

三、

称名寺ははじめ別業内に設けられたものであるが、創建については明確に知ることはできない。

称名寺伝存の「伝法灌頂雜要抄」によると

「辨營入輔阿闍梨 花山院中蓮花息

正嘉二年秋四月二十三日 時 於武蔵国倉岐郡大

蓮庄内金沢村、點慈守平実時望蓮佐之」

と載せてあり、正嘉二年に六浦金沢の実時別業内で伝法灌頂の式が行われたことを知るが独立した

寺ではなかったようである。

次に「南東往還記」弘長二年二月廿七日条

「又去鎌倉不幾、有一寺、号称名寺、年來雖置不断念仏衆、已令停止畢」

同じく弘長二年三月一日条

「又觀證爲長卿孫來台 称名寺別当 越州後見直鏡等三人、一向可沙汰僧事之由、越州申付之向、卜宿所於僧房之辺各令移住」

とある。

「南東往還記」は金沢実時が見阿を使者として西大寺殿尊の南東下向を懇請し、ようやく実現のほこびに至り、鎌倉にやってくる道中のことから鎌倉に於ける受戒についての師の言行を随行した弟子性海が筆録したものである。

念仏寺であり、すでに独立した立派な寺院となつており、しかも実時外舅來台を別当とし、觀證、直鏡等三人に僧事沙汰を命じていることから、称名寺の様子が知られる。

更に「金剛佛子殿尊感身孝正記」弘長元年十月十八日条

「具阿弥陀仏肩鎌倉越後守平実時使者、一切経一藏寄進西大寺、鎌倉照明寺寄付子狀將來。」

可下向兩康文由云、難治旨爰端之間、二通寄状
共送年々、

と云い「照明寺」とあるのは「称名寺」の宛字と
思われる。すると一年早く称名寺は立派に寺院と
しての規模をもつていたと思われる。創建年代は
正徳元年から弘治元年の三ヶ年の間と見るべきで
はなからうか。

奈良西大寺殿寫の関東下向を機として興隆一門
は眞言律に轉じ、称名寺に律僧密潜を迎えて庵基
とした。この頃には称名寺々領はなく一門の
寺用配分に依つてその運営の基盤となつていた。^(註五)

弘治八年顯時の代に延嘉寺の霜月騷動に連座
して下總國地主に歸属する際に正式に寺領内々
敷地并寄進並^(燈臺)、次で下總國下河辺庄下方内が永
仁二年に寄進されたことが奥檢目録に見えるが^(註六)
これが称名寺々領として比較的古いものであ
る。

顯時寄進になる称名寺々内外敷地がどの程度の
ものであるかは副進の檢圖による他ないが六浦庄
内金沢村の称名寺の境内(現在の赤門より文庫裏

山際に至る程度)で文字通り敷地の範圍で所領と
しては大規模のものではなかつた。しかし「法則
的」に云えば領主脈の寄進で金沢氏の支配から離
れて独立した性格に変化したという点で称名寺の
発展をさぐる上に無視できないものがある。

次の下總國下河辺庄下方内称名寺領實檢帳に見
える所領であるが寺領村々とは、一体どこをさす
のか、どの程度のもののなのか。

佃三十三丁九十歩

前寺田三十一町七反十歩

前寺田百廿六石九斗四升三合三々三戈

三人の名主が夫々知行している。何れも……

跡とあつて宅給正の所領を引きのいたものと思わ
れる。宅給主は金沢氏の家人と推定されるが三人
の名主の一人である鳥子兵衛三郎は上總國下河辺
庄筑地領地頭取を、顯時代給せられていた鳥子中
務^(註七)判時の一族であろうとする推定から成り立つ。

鳥子氏は廿四町余、上野蔵人二郎跡八町余片山
入道跡二町二反余である。

寺領の成立はこの奥檢帳の書かれた永仁二年に

は既に寺領とあることからこれ以前であることがわかるが永仁二年に――跡となっているところから考えると金沢氏の所領になったのは実勢が実時の頃であつたと思われるが寺領に転じたのは実時があるいは願時の頃ではないだろうか。私は称名寺内外敷地を寄進した前後と考へたい。舟越博士は称名寺建立の時としているが、いふれも推測の域をでない。

村々の位置についての実証は舟越博士の卓越せる叙述に従うと赤岩郷三ヶ村がそれにあたる。赤岩郷は三ヶ村と十四ヶ村の二つに分かれていて代官は夫々別である。三ヶ村の方は米納、十四ヶ村は銭納あり、後者も後に寺領となるが收納体系が異つてゐることは寺領化の由來の方がいによるものであるか。

又年月系辭寺領三ヶ村百姓申狀(註六)によると佃三町五反の種子のことに因するもので前記実檢帳に見える佃三町五反九十歩と一致する。

とするとこの三ヶ村は永仁二年実檢の寺領であり、三ヶ村は夫々三人の名主の支配せるものであ

ることが理解できる。村名については赤岩郷内河、外河があり外河には上村、下村があり内河、外河上村、外河下村の三ヶ村である。(註九)

初期寄進地と思われる寺領は以上であるが所当田三十一町七反余、所当米百廿六石余という数字は決して莊園領主として大きいものではなくて寺用には充分でなく称名寺の規模もまだ結構ではなかつた。

しかし、願時の子貞願の代に入つて彼が寛元四年(一一三二)大渡羅探題、正和四年(一一三三)執權連署、嘉曆元年(一一三六)短日ではあるが執權となり、その子貞將大渡羅探題と幕府の重臣に夫々就任するに至つて金沢氏の勢力大いに振い、それにしたがつて称名寺の僧勢もとのい文化活動の中心地として関東地方に盛名をばせた。同時に所領も急速に増加し全盛時代を迎えた。

貞願時代寄進地と思われるものは次の所領である。以下これを概観してゐたい。

南頭陣代寄進地

信濃國大田庄内文書郷地頭地(註一)

延慶三年、尾永忍寄進

下總國鹿生庄山口村、南極立村(註二)

正和四年、尾某

常陸國北拜 寄進年不明、北条熙時(註三)

下總國東庄内上代郷三分一

北郷管地 元亨元年(註四)

同國同東郷内諸村

北郷管地 元亨元年(註五)

同國同千土師郷東之上村三分一

北郷管地 元亨元年(註六)

加賀國輕濱郡

北郷管地 嘉暦四年(註七)

下總國下方内毛郷

山河院尊寄進、元亨元年(註八)

康江國天竜川、下總國高野川両橋

幕府橋錢寄進カ元亨四年(註九)

上總國土守郷内田山郷

寄進者不明、嘉暦三年(註一〇)

甲斐國大石木郷信濃國鹿生庄

寄進者不明、正慶元年(註一一)

越後國奥山庄金山郷地頭地

寶時立子寄進と抄す

元徳三年(註一二)

金沢氏滅亡前後の寄進地

貞持の寄進、正慶元年二月(註一三)

下總國下河辺庄赤岩郷

信濃國大田庄内石村郷

武蔵國大浦庄富田郷

買得地

石村御買地(信濃國カ)年代不明徳治頃カ

某國二押郷内某名田(正和五年)

下總國幸嶋郡上之郷稲屋村之内下村の田八反、

在京一寺(元亨三年)

下總國群森左永寺郷内田島(正和三年)

相模國吉沢買得地(文保二年)

伝来不明の諸所領(カッコ内は文書の年号)

伊勢國寺領平松一尺壁口一尺（嘉元二年）

信濃國郡八條治領カ）

万福寺（元長元年）

上總國高根庄（元応三年）

平福寺（元亨三年）

足利左内寺領（元徳三年）

龍水田方合（ ）

伊賀國田田（ ）

伊勢大日寺（嘉應四年）

田時社（正中三年）

仲家（元代末詳）

安房國下尺町深（元代末詳）

南北朝動乱期における新寺領

相模國山内庄若原領（元弘三年）上杉重能より買得

武蔵國大澤庄全利吉郷内白山堂地主庭（建武三年）足利基氏の寄進

上總國新堀郷（建武五年）初見、伝来不明

上總國之保郷（暦応二年）初見

寺敷地内掘垂場（観応三年三月）足利尊氏寄進

伊豆國島宮庄上方地頭邸（文和三年）足利基氏寄進

進

下總國大須賀保柴村内一町在家一寺奈土郷内下坊別当邸（応安四年）沙弥聖邸、右馬助憲忠の寄進

進

上總國金田保内高柳村（康暦二年）輕海郡と相博

上總國松葉郷内百葉文之地（同右）

景親松永名（貞永三年）初見

南北朝統一以後の新寄進

武蔵國品河神奈川西（永弘別銭）（明徳三年以降）

大浦庄内新堀寺内前門所（応永廿九年）長尾高景の寄進

の寄進

大浦大蓮閣所（永享四年）足利持氏の承認（同五年より三年間知行）

以上と同して、最も量的にも量的にも充

実した所領を所持した時代はやはり貞觀の頃であ

る。（前述）

称名寺の所領は大別して領家・地頭・名主・地頭になるが、中世に於ける「地頭」とは得令權にすぎないことは中田實^{（中田實）}博士の指摘されるところであるが、地頭は伴うものであつて、その所領運営にいかなる現地支配形態をとつたかが向標であり、領家・地頭としていかなる代官・農民の把握の仕方をしていたかを明瞭せねばならない。

称名寺の場合、鎌倉室町時代を通して領家・地頭・名主のものを合せて四ヶ所の所領にすぎない。舟越陣土によるとこれらの領家は華なる得令收得者として軍官化した領主ではなく、現実に下地と農民を支配し得る在地性の強い、むしろ地頭的な領主であつたとされる。金沢稱名寺家内外教地、六浦庄・富田郷へ前望谷^{（前望谷）}は共に寺家の直接寺の及ぶ所領である。殖生庄・山口郷にしても願時が願月寺對に達達して十餘里に達していたゆかりの地であり、室町以来の所領であり、かなり称名寺の支配がゆきとどいていたものと思われる。領家的な領主よりもむしろ現地支配の強かつたこれらの所領に對して付屬的なのは地頭である。

地頭・地頭と思われる所領は十六ヶ所あるが、全体の所領数から比較する場合半分であるが、その地・不明の所領がかなりあり、それらの所領中にも地頭・地頭があつたものと思われる。これらの所領は生地頭の私領化したものか、不輪地として寄進されたものであつて、寺家の名目上の所領は地頭・地頭でも實質的には領主であつた。

その理由として寺家が代官を地頭代と云わないこと、その代官が単に地頭給田の年貢の及でなく、全知行地の年貢の全体を寺家に送進していること等が挙げられるが、次の史料は更に直接的に證明し得る。

下総国東上代郷代官通契^{（通契）}

「金沢領押書」

「下總」

押書^{（押書）}は取り料足も沙汰して

下総国東上代郷内金沢領領家御年貢事、

合六貫文

右御年貢者、今月中并可申候、若未進申候事候者、以一度沙汰申へく候、

仍爲後日折書加件

明徳四年十二月七日 代通泉（花押）

これは称名寺が上代郷代官通泉に料足へ年貢銀を沙汰したのに對して、通泉が諒承した旨を寺家に返報した書狀である。

こゝで注目すべきは「金沢領」と「領家」といふ點である。金沢天より寄進された所領であつたからして、金沢氏時代よりの呼称を使用していたものと思われるが、このことは金沢氏が最富の領主であつたことを意味するもので、おそらく称名寺の前庭も名目は地頭庭であつたが領家としての庭ではなかつたかと察せられるのであり、上代郷の一例からも他の地頭庭も称名寺以外に本所がなく領家として下地を一回知行したのではないかと思われる、それでは本家はどこであつたかと云うと幕府政所を依頼したと思われる。

だが上代郷の他一、二例だけでは全体がどう

であつたとは云いきれないし、私自身個別的に史料を充分吟味しきれないので断言しきれない。今後更に検討してゐなければならぬ問題である。マ彌善末から望町期においては狂國領主を全て領家と解釈し、そう呼んでゐるのが一般的であつたさうであるから一例の史料の文字だけで領家的であるといふことには多少の懸念が表る。

その他の所庭として名主庭、院主庭、両錢等が挙げられるが、称名寺の経済的背景としては絶對的なものではない。寺領の主要な所庭は地頭庭であつたと規定することが出来る。

此寺用配分が文書に表れたのは舟越博士の所定

によると寛元元年(Gen'ei)から寛文三年(Genbun)の八年間、何

れかの時期であろうとされる。審海が称名寺

開山となつたのが文永四年(Monmu)（一二六七）一兩

博士、金沢文庫の研究年表であるから寺用

配分狀としての文書の初見と思われる乾元元年(Gen'en)

年以前に何らかの形で寺用配分がなされてお

り、審海入寺の文永四年(Monmu)から所領寄進の最初

- と思われ、弘安八年までの十九年間の称名寺の通名は寺領がないのであるから、実時による経典的教場が個人的に何かの形であったものと思われ出る。舟越博士は下河辺庄下方内称名寺々領村々永仁二年(1111)実検目録へ金沢文庫古文書所新文書編五二三三によると三人の名主の名が見られ、この名主は金沢氏の家人と思われ、その惣給は頼時以前に行われたものらしく、実時、実泰にまでさかのぼり、寺家之の寄進は永仁以前にさかのぼり、実時が称名寺建立の際に寄進したものであるといわれる。
- 金沢称名寺々領の研究五七ページ
12. 金沢文庫古文書五二。七、北条頼時寄進状案(表字は古文書番号、以下番号のみを記す)
13. 五二三二
14. 舟越博士前掲書六〇ページ
15. 同書二九ページ
16. 五七
17. 五六七九、五六八〇
18. 五三七二

19. 舟越博士前掲書五八ページ
20. 五五二八
21. 五二八五
22. 五三〇八
23. 五三一五
24. 五四四三、称名寺領東盛義跡三十分付文書
- 案
25. 五三七六、鎌倉將軍家下知状案
26. 三九三、貞願書状
27. 五三一〇
28. 五三三二、鎌倉將軍家御教書
29. 五三六一、上総国土守郷内田畠等寄進状請取状案
30. 五四二九、大石永親有寺田畠結解状
31. 色部文書、寛和二年足利幕府裁許状
- 清水正健、左園志料
32. 五四〇五、金沢貞将寄進状
33. 称名寺所領の分類については舟越博士前掲書に詳細に述べられているが更に小笠原氏・武州金沢称名寺と房總の諸寺にて若干訂正を

れている。本文においては小笠原氏の整理に
したがった。

34 中田肇博士「法制史論集」

35 舟越博士前掲書続編一六二—一六三ページ

36 同書一五九ページ

37 五六。七

四

杯名寺々領の分市を見た場合、先づわかることは、散在領領であるということである。

鎌倉期には下総、信濃、常陸、因幡、加賀、遠江、上総、甲斐、越後それに杯名寺兼地を含めて十ヶ所、畠得地を含めると信濃、伊勢、伊賀、安房が加わり、鎌倉十四ヶ所、不明の土地もあるから更に奥州は加えられるわけになること、思われる。室町以後は寺領専ら政策が盛ん成功して近辺にまとまっているが、相模、武蔵、上総、下総、伊豆等に分散している傾向が見られる。これは中世一般の現象で、特に鎌倉時代には御家人達が全国に欠前地を求めて奔走したのであり「肥」とは得

分権が重要な内容であってみれば、代りからの年貢送達と所領の支配が確保できれば遠隔地といえどより好まはでなかつたのである。

北条氏が全国に所領を拡大し、特に陸奥国に地頭、あるいは地頭代をおき、得宗領と称し遠隔地支配に懸命であつたことは津軽地方の所領形態からもうかがわれ、執権邸でさえかくの如き有様であるから他は推して知るべしである。

しかし、南北朝の動乱以後は次第に遠隔地の所領は経営困難になり、寺院の近辺に集中せねばならなくなつたのであるが、その背後には鎌倉末期室町時代にかけての悪化期荘園の問題が考えられよう。

建武中興以後、足利義満が実現するが、その政權の根柢は根柢の弱いものであり、南北朝の内乱は単に兩統の争いではなくて、全国を捲き込んだ社会的変革であつたが、荘園内ではこの機に乗じ、名主百姓等が荘園年貢の減少、排除を企て荘園領主に反逆し、鎌倉末期から各地に活躍した悪党はこれらの荘園の荘官、名主達であり、かゝる例は東

大寺文書等に現れ^{推定}、太平記^{（實録）}などにも武士達が近
辺に寺社本所の所領あれば増を越えて知行するこ
ういふことが默認されて當然の如くなつてゐるこ
事が知られる。

你名寺々領にてもかゝる例は現れ^{推定}るのであつ
て外部からの侵入に種々の手段を講じてゐる。要
院の出入すれば有力な守護や守護使に乱暴停止を
依頼せねばならず、又その守護が所領を押領しよ
うとするなど寺家側にとつては決して油断がな
なかつた。

かような悪癖の侵入や南北動亂による全国
及のたゞ寺家側では治を維持のたゞの人費と費用
が急増し、守護士の食米、祭祀とか守護使酒肴料
とか、国中動亂勘計といふものは毎年の如く年
貢結解状に見えるようになる。

次に提示する文和四年（一一五五）陸奥國年貢
結解状、康永元年（一一三三）田嶋國十士師郷の
年貢結解状はかゝる事情を物語つてゐるのである。

田嶋國陸奥國年貢物結解状

「参佰柒拾貫柒佰玖拾文

除

拾貫文 米代錢贖償

陸拾伍貫文 工權用途

拾三貫文 雅樂將監在國之向会天二

陸拾貫玖拾伍拾文 国中動亂勘計并在國之

雑用以下

義安錢

貳佰拾玖貫捌佰肆拾文

（略）

右、大抵 違如件

文和四年十一月十八日

同文書 五四九二

田嶋國習士師郷上村年貢結解状

注 達 田嶋國習士師郷上村康永元年御年貢結解

等

合

米八十九石一斗二升二合二勺四セ

錢十二貫三百八十八文

所清

(中路)

十二石九斗八升

自七月至十一月十五日兵糧米、依

人数出入雖有増減、大橋十五人

分、任日欠記、雖可注進、依事繁

賂之、但、除私人數七人

廿四石 用心人雇賃八人分、別三五石

四石

代錢四貫文 七月中和町
夏秋牙定 守護方推掌

二石五斗 城用心中酒肴雜事以下

一石七斗 城談食物

三石 悪党面蔭寄来之時、見次等酒肴雜

事以下

この二例は特に代表的なものであるが、千土師

郷の場合には、る対策の費用が八十九石中四十八石で約五四%を占め、輕海郷の場合には約三十八%を占める。寺領が益々減少し、年貢收入高が乏しくなっている室町時代において、寺院側の経済的、精神的打撃がいかに大きかったか、充分察せらるる。

輕海郷については、金沢氏時代に常陸國北郡の替地として嘉曆四年^(三九七)に寄進され、称名寺所領となつたものである。替地に際しては金沢貞顯の奔走が大きく功を奏し、白山の末寺が所領内にあつたため、蒙昧の打撲しに反対するなどという問題も無事に済んだ。それでも經營の初期には、替地となつた嘉曆四年には白山八院の坪領分が四十六町もあり、称名寺側の残田九町八反の知行、所当錢は白山八院分錢三百二十九貫に比して、寺家は僅か五十七貫文に過ぎなかつた^(註三)。だが称名寺側は所領回復のためにいろいろ努力を重ねたようである。郷所出物、文書紙計に、先地頭後家方へとか「守護方田湍寺」などえの代錢、礼物などの支払われた書文が記載されている^(註四)。その結果が翌元徳

二字に押領された田の回復に成功した。^(註四)

かゝる称名寺側の勢力回復の主な原動力となつたのは推掌であつたと思われるが、私は當時の人々の権力者に対するある程度の素直さは認められると考へているので、金沢奥頭が内管領長崎高直に奥権をにぎられてロボットの存在^(註五)であつたとしてもなお相當の権威をもつていたものと思われ、奥頭の奔走が大きく振づかつてゐたことが書状からもうかがえる。^(註六)

輕海郷の所領は元徳二年の年貢結解状において田五六町二反廿代で、寺領は三七九石九斗八升あり、公事錢も一。六匁七。七文の金額にのづいてゐる。

以後輕海郷は康暦二年上總国佐貫郷内百貫文之地及び上總国金田保内高柳村と相博する迄の約五年間、称名寺々領の中でも大きな財源となつてゐる。

次に室町時代に入ると先述の如く経営困難さが増して来るが、それでも輕海郷の年貢結解状の最後の年代の永和三年の結解状には三三。〇貫三。二

文の年貢高で、一方寺納高は一六三貫三。〇文であつたことがわかる。^(註四)

しかし元徳二年の結解状に見える寺納高三。九石九斗八升、公事錢一。六匁七。七文に比すれば、これに減少していることがわかる。

これらの事情を所領や年貢の増減だけから推定するばかりでなく具体的に示すものとして現地代官の動きが考えられる。

次の文書は代官果照が称名寺役僧了兼に対する書状で年代不明だが内容から察すると文和年間(一三五二—一五六一)頃と思われる。この頃の果照書状にすでに寺家に対して相博のことを促したことが記されているからである。^(註五)

「如今者、当郷上古こそ候へ、指無御権威も候、不然諸方よりなづら水候てハ、僧侶御代官何れも不可叶候哉、只東方近世之ニ言許所ニ御相博ハ可爲御大切候也、永代御興隆ニ一蹶の御上洛庶幾申候、何様左様にも候ハルニハ当年口貢ハ於京都可御用用候哉、今度可御左右候、可用意候」^(註六)

この当時にはすでに金沢氏時代の權威はなく、方より勝手な侵略をうけて、代官はじめの名僧等の寺領維持の奔走がせつぱりまうた状態をよく表している。

しかし困窮した中にも、世上動乱に対処する心がまをみせ、新田廂等にも意を用い、苦下の余裕が見られる。(佐賀)

更に次に示す永和三耳二月廿口日付の經海郷代官僧靈康注進状に、相当悪化した様子があるが、それである。即ち寺家に對して既所屋が被災され、不明だが何か焼失したこと、多分耳賣米の額が、所定米の焼失、加賀守護富樫氏の不給手張勢、白山に思われる神人の箱内への出入、守護寺より宛てられる課役が種々異いことなど書き注進されている。(佐賀)

これら寺領維持の努力にもかかわらず次第に貧困難のためついにこれを手放し、替地を兒のけるため経運動を展開する。(佐賀)

ついに刑部少輔長康所領上總国金田保内高柳郷、

同國佐賀郷内百貫文之地と相傳し、康暦二年八月三日足利義滿御教書によって法的に承認されたのである。

それでは相傳され新寺領となつた高柳郷の佐賀郷内百貫文之地はどうであつたかと云うと、現在の史料以外に何の寺がかりもないが、康暦二耳前後と思われる高柳村炭錢目録によると十四町四反十歩、永永十年の高柳村本秋富結解状によると畠が十一町丈へ十一町二四〇歩、うち現作は七町九反半、都合大豆石四斗八升四合という数字が示されるが仮に年代を同じものとして考えると約二十五町で、そのうち寺家の得分が若干あるわけだから余り大きい所領とは云えない。

佐賀郷は地名寺々納分は四〇石前後であつたことが知られる。(佐賀)

高柳郷を仮定二十五町と取て一反歩から一石の寺領として、場合二十五石であり、佐賀郷分四〇石と併せて六十五石、石を錢に換算して一石あたり一貫として約六十五貫文という高にすぎないのである。經海郷の相傳寸前の寺納がそれでも

まだ一六三頁三百六十六あったこと、比較すれば相博された新前領状に比べて悪いものであるかど理解できる。

しかし相博するにはこのような懸念は充分子見できたのであり、むしろそれと承知で相博に踏みきつたのを寺が「指物繪圖」に言ひとて熟知し自力では終極結果が懸念になった事を信じたからに他ならないからで、少額ながらも確実に収入の得られる寺領を選ばせるを得たところ、に称名寺の経済力の下座を占めてゐる、と推定できる。

38 東大寺文書、寛永四年十月七日

東大寺離散僧等金合事書

39 神田東太平記廿七

40 五冊二一 氏名未詳法燈

41 五三六五 加賀國輕海郷田敷得分注文

42 五三九三 輕海郷年貢清物結解状

43 舟越氏前掲書八二ページ以下復元文書

44 金沢貞頼と長崎氏の關係については、歴史教

育一九六〇、七「得宗被官長崎氏の専権」金

沢貞頼書状を通しての考察」高梨みどり氏の研究に詳細に述べられ、貞頼の政治的立場がよくうきほりされている。

45 三九五、貞頼書状

46 五五八二、輕海郷年貢清物結解状

47 五五二五、

48 一二六〇、泉照書状

49 五五二五、文句元年輕海郷代官泉照陳状

50 五五八二、

51 一二八七、年代不明泉照書状

52 五六四一

53 五六四〇

54 五六六八、五六七六、五六八三、五六八七、

五六八九

五

前章まで寺領の交還について述べて来た。

称名寺の宗教活動はその所領を中心にして行われ文化の交流も所領内に於ける寺院が媒介となつて活潑に行われたといふことの裏証的研究にのい

ては、先年荻野三七彦博士が「鎌倉時代に於ける文化の地方伝播」^(註五)と題する著作の中で埴生庄、雲富山慈恩寺、土橋東禪寺等の下總の所領及び諸寺と金沢氏、称名寺の關係及びそれらの具体的活動の詳細をあきらかにせられ東國の初期文化圈の形成過程を示されている。

一方、小笠原長和氏の研究「武州金沢称名寺と房總の諸寺」では金沢文庫古書目録を中心に金沢文庫古文書を精細に分類整理され称名寺と教王活動の盛んに行われた房總の諸地域の寺院及び僧侶の所在と動靜を明確に示がきだされた。金沢文庫研究に志す後進の研究者にとって氏の論文の業績は大変感謝すべきものといわねばならない。

本稿はひとえに氏の論文に於ける内容を踏襲したものであり、みちびかれたものである。こゝに学恩を謝する。

房總はいうまでもなく上總、下總、安房の三國であるが東京港を隔て、丁度金沢とは対岸の位置にある。金沢からは海上を渡つてゆけばひとまたぎであり、事実、称名寺所領からの貢納物輸送は

舟運によつていた。^(註六)年貢結解状にも船賃の記事が散見せられる。^(註七)

又僧侶の房總、金沢間の往来も舟運によつていた。^(註八)

金沢氏及称名寺領の房總に於ける所領と相俟つて交通の便宜は更に僧侶達の往来を促したものと思われる。その他に僧侶間の往来を促した原因として房總に於ける仏教の宗派の普及と分布の向應もあることかと考えられるが今後の研究にまたねはならない。

鎌倉時代から室町時代にかけて称名寺と關係のあつた房總の諸寺を挙げれば左の通りになる。

正応四年称名寺三重塔供養に^(註九)参加した僧衆の中には下總国諸川報恩寺住僧証觀房、印禪沼荒海寺の僧明戒房、称名寺僧侶であつたが後に下總香取郡千田庄土橋東禪寺に棲り住んだ戒円房等が挙げられる。

その他金沢文庫古書目録等に散見する寺院及び寺院のあつたと思われる所在地名は次のようにな^(註一〇)る。

空房

- (1) 清澄寺
- (2) 長佐郷打墨
- (3) 下尺万真福寺
- 上總

- (4) 天羽郡佐貫談所、新善光寺、宇國寺
- (5) 金田保内高柳村
- (6) 小湊木森寺
- (7) 伊南岡郷常樂寺
- (8) 佐是郡河田庄常樂寺
- (9) 長生郡西村字報恩寺通場
- 下總

- (10) 千葉庄内大日堂
- (11) 〃 堀内光明院
- (12) 千葉寺間庵堂
- (13) 千葉庄池田郷口須賀間庵堂
- (14) 下河辺庄前林戒光寺
- (15) 下河辺庄末岩郷光恩寺
- (16) 上辛島郡稲尾熊野堂

- (17) 大森長樂寺
- (18) 印西郷
- (19) 殖生庄竜角寺
- (20) 雲雷山慈恩寺
- (21) 大須賀某寺
- (22) 神崎庄郡郷
- (23) 海上引振寺
- (24) 印東庄石橋郷、印東庄六崎大福寺
- (25) 匝彦庄米倉郷
- (26) 額木光明
- (27) 千田庄土橋東禪寺

①にのいてゑると(目錄)

求聞持口決、写、智海手沢本

文永四年(即三月五日妙性書写丁、本云、同年二

日於安州清澄寺書写丁

とあり抄名寺岡山抄性房智海の書写のあったことが知られる。同じく寂澄という僧の書写活動がいちじるしく見られるが抄名寺あるいは金沢氏と岡係があつたと思われるのは、岡東往還記弘長二

年七月廿五日系、「又越州戒類所望、入夜誦懺法、相州望送越州送會齋聲寂澄明永真、聽衆如雲」同じく廿七日系にも「澄澄の名が聞かれる。越州とは金河興時のことである。又、称名寺住侶の清澄山参籠下向の消息や房州行の商人に手紙を授けた千葉運區中の称名寺阿闍梨某僧の消息などが見られ、称名寺と清澄寺の關係が知られる。

(3)は伝来不明の所領、下等寺にあり、住持であるが下尺万廻については金沢又、（金沢）寺に氏名未詳某僧の消息があり、（金沢）寺下尺万廻米銀所納狀によると公田米九石、正米米九石六斗二分、畝田米六百四十匁文があつたことがわかれ、更にこの所領について称名寺が明證國經左衛門と相傳しようとしたが結局康暦二年八月上旬國經明保内藤柳郷及び同國佐賀郷内百匁文之地と相傳が決定し義満親教書に依つて実現し、下尺万廻は成地しなかつたようである。称名寺に属した年代は知り得ないが称名寺と直福寺との關係は充分あつたものと考えられる。

(4)の佐賀郷は前述の如く康暦二年八月に加賀國

輕海郷と相傳になつたもので、称名寺所領になつた時は金沢氏滅亡後四七年を経過している。この所領は國術領で領家は春日社である。（鎌倉）金田と寺領に分かれ金沢寺は田畠十二町一反小、（鎌倉）年貢五十七石六斗八升で直福寺納は約四〇石である。

正應六年書が佐賀郷所で行われてゐるがこの頃はすでに金沢談義が始められており、称名寺三重塔供養は正應四年に行われており下總方面の僧侶が参加していることから、称名寺と佐賀郷内諸寺との交流は早くから認められるところで、称名寺阿闍梨の墓状にもこの往來のことが記されてゐる。（鎌倉）

(5)金田保内藤柳村は佐賀郷と共に輕海郷と相傳された所領である。（鎌倉）金田保内藤柳二一七六、向山書牘編四九一四等に香取郡十田庄土橋東禪寺、古取郡吉岡雲富山慈恩寺と本森寺との交流が知られる。

一宮庄内南上郷は鎌倉元寛寺々領で室町期に寄進されたものである。（鎌倉）小滝寺の範時に入るものとされる。

(6)は文永十年願書名越東榮寺岡山源俊が、

で弟子慧心に伝法灌頂を行っている。源氏は西大寺藏尊の附法を受け弘安五年九月に死去、称名寺二代長老剱阿は源俊親の弟子である。

(6) 剱阿廿四^{（弘長）}の時に不動寺の書写を行ったところである。

(7) に関係した僧侶の中に恵親の名が挙げられるが、恵親は剱阿よりやや後輩ではあしは吉明の附法をうけている。千葉方面には関係の深い僧で千葉堀内に聖海を訪問、元亨二年八月廿二日元瑜方西院の伝法を受け十一月頃称名寺歸寺庵年は千葉方面に居住したらしい。下總植生庄山口鋪、千田庄土橋東禅寺及大嶋、東庄上代郷勝福寺親等のことが恵親の消息に散見し、香取参詣のことも見え、特に下総との関係も深いようである。徳治二年三月称名寺灌頂には此慶と共に講頭及び散花師をとめている。

(8) 前林戒光寺は現在茨城県猿島郡に属し剱阿の流れを汲む剱海の書写が嘉暦三拜に行われていゝる。下河辺庄内には金沢氏の所領があり称名寺所領が確立する以前金沢氏の寺田配分によつてまか

なわけていた時の所領を見ると谷腰御分として下河辺庄前林郷の名が見られ前林郷から寺田配分を提出していたことがわかる。戒光寺に關する史料はこの他文永十二年四月二十七日実時讓^{（建永）}があり、庄内前林・河妻面郡及び平野村を信濃國大田庄大倉・石村面郷と共に藤原氏に譲っている。この所領は前述の称名寺田用配分状に浴殿という女性の所領となつてあらわれてくる。そのうち河妻郷のうち田二畝を郷内戒光寺之某性が文保二年に寄進をしている^{（建永）}。

(9) 赤岩郷は金沢氏滅亡前後の寄進地で貞将により正應元年に寄進されたものである^{（建永）}。

(10) の大森の所在であるが応安二年十一月六日長樂寺鐘銘「下總回植生西大森郷長樂寺鐘^{（建永）}」年代表詳称名寺々領年貢米注進状「世七石四斗七合四勺二文植生庄、廿一石五斗六升五合五勺七文植生西^{（建永）}」、貞頼時代寺田配分状「大森殿御分^{（建永）}」

植生西大森郷

（建永）
第一貫三百十六文し

等の史料が見えるが大森氏は金沢氏の一門であり大森郷は植生庄内にあり長樂寺は大森郷内にあ

つて称名寺と關係があつたものと思われる。

(6) 寺名は不詳であるが書写が行われている。

摩訶止観周書 写

(第一卷) 弘安三年四月廿六日於下州印西談御之、

諫師月住阿闍梨御房

(第二卷) 弘安三年七月八日始之、於印西郷

(古書目録)

嘉元三年四月瀬戸橋(現横濱市金沢区、六浦庄

内)造營棟別錢注文案には印西分拾貫七百六十八

文の貢担があり、嘉元三年七月六日東願から明忍

(勉阿)宛書状によれば、

「印西沙汰事□□人構謀書之由訴人令申候、云

々、禮恨不少候、其上有金沢殿可申方尺之由抑

候之向可存其旨候」

又年代未詳某年七月一日付惠廻書状には、

「其後何条御事□□、不審無候、抑、換名禪

門、去月廿一日印西、無相違被請取候了、今度者、

於南東御^(寺底)下被請取也、兼又御寺及領地生庄山

口事、於鎌倉、迄、申御沙汰候而、当依毛被召

様可有御許候、今月一日侍所討面之次、山口事

、於鎌倉、迄、御申候はんと被申候き、此とを

りに候は、可渡申之由、物語候也、此事に應

進状候、

恐惶謹言

七月一日

惠録(花押)

進上、称名寺御侍者

これによると称名寺領として棟別錢の貢担が所
領維持に關する關係僧の消息などから称名寺との
關係がうかがわれる。

(4) 殖生庄は弘安八年頭時が霜月騒動に連座し
て離居したゆかりの地であり、庄内の竜角寺は書

写、談義がさかんに行われた一大拠点でもあった。

目録に見える僧侶の動靜を見ると永仁四、五年

に談義、朗海、書雪、北慈、朗海、牡丹、定祐等

の名が見える。活動年代も文永九年から元祐二年

頃迄であるが目録に見える年代だけであるからこ

れに限定することはできない。

(5) この寺は香取郡大柴町吉岡に現存する。文

永年向大須賀胤氏後に入道信蓮の陶基である。曆

応年向足利直義の戦勝祈願の安国寺として大寺で

あつたようである。扁山円定房眞源は西大寺家眞の門人である。現存の延慶三年三月幢銘に「南山住持比丘眞源書」とある。称名寺四代長老となつた親達房眞源は眞源の養子であるが雲富山慈恩寺で受戒して後に称名寺住僧になつたものである。元亨二年十一月十八日慈恩寺長老本業房我覺は湛叡と共に西院流の受法を相承している。

(2) 大須賀郷は大須賀氏の所領であることは応安四年四月沙汰聖庇、右馬助憲宗の寄進狀によると大須賀保内柴村内田危町在家寺并奈土郷内下坊別当庇を称名寺末寺の武州金沢大富院に寄進しており、大宝院に対する田畠在家寄進狀に「停止諸公事、可歸慈恩寺、宝庇寺兩寺側也」として兩寺の側に準じて諸公事を停止している。なお宝庇寺は大須賀氏の菩提寺である。

(3) 東禪寺は香取郡多古町に現存する。この寺との深い關係を示すものは称名寺三代長老本如房湛叡が金沢氏滅亡前後にかけてひんばんに東禪寺にでまいて書写あるいは談義を行つてゐることである。

以上のように称名寺と房總諸寺の關係について教學活動の行われた寺院及びその所在、そして称名寺々領との關係について考えてきたわけであるが所領を通じての教學活動がいかに有効であつたかは鎌倉幕府滅亡前後の称名寺關係僧の消息によつて裏付けられる。云いかえれば、所領あるいは末寺等の維持經營の不況は教學活動に大きな障害をなすものであつたということである。

特に土橋東禪寺は湛叡が嘉暦三年(一三二八)二月廿四日談義を初鬼(目録)として元徳三年(元弘元年)、建武二年、延元二年、延元二年等數度にわたり座談義を行つてゐるところである。書写等に至つては更に多く見られるがいずれにしても称名寺と東禪寺の往来はしばしばあつたものと思われる。この東禪寺の所在する千田庄は千葉氏の一族千田氏が領有してゐて、誰か一族の法号から東禪寺なる寺名が由來されたものであり千田氏の氏寺であつたと想像されるわけである。

元弘三年八月の北条氏滅亡を前後として土橋東

禪寺も動亂の渦中に巻き込まれるが、丁度この頃湛庵は元徳三年（一三三一）から建武元年三月（一三三四）迄の前後三年余りを東禪寺で送っていた。動亂を目前に見たわけである。

即ち

「建武二年^{以下}下總州千田庄土橋東禪寺以業疏當卷充年始明講、然世上転変之後、三四年以來都鄙不靜謐、道俗尚多危、就中當寺現住結音縁之仁有敬輩故守護使亂入被召取了、雖機難不極而難默止故、始正月十七日、終于二月七日、首尾二十日方談之訖、世法佛法悉廢滅、何日何時更欲再興悲哉、嗚呼^{（註三）}」

「建武二年^{以下}十月八日於下總國千田庄土橋東禪寺重開講肆、至同三年^{以下}四月十二日^{以下}日三十四五日其外於下万事講說一部訖、去西五年末一天衆動亂、隨年雖増未知靜謐之期、此一而年向當固殊^{（註四）}諒事更危更無^{（註五）}」、就中當寺居而陣之中向^{（註六）}以下^{（註七）}」

の記事が見られ土橋近が危機に於つた。その他湛庵書状を見ると当時の戦亂に不安を覺

え称名寺、寺領について憂慮していることがわかれる。土橋だけでなく慈恩寺の方も同じような情勢であつたらしく次の書状は慈恩寺にあてた湛庵のものであるが慈恩寺の無事を喜んでゐる。

「騒動候覽、土橋^{以下}も、何鉢令恐怖候けむ被察候、雖然、今者無意之由承候、心守候、此鎌倉^{（註八）}迎之鉢、無殊事候、此僧定被申入候敷、今度早^{（註九）}暇過法候、然御寺領等無相違之様、此僧被申候、候入候、若無御指合候者、霜月之比、可有御上候なれは、毎事期面拜候、恐々謹言

八月廿三日 沙門湛庵（花押）

謹上 慈恩寺御侍者^{（註十）}

「此向動亂、面々御大事、乍恐奉察候、雖然於今者、多少分属靜謐候、返々悦入候、就中土橋城御警固之由承候、寺家等定被懸御意候、殊次恐^{（註十一）}悦無極候、毎事期後信候^{（註十二）}」とか見えてゐる。

しかし、天下の大勢は少康を保つので決して湛庵の念する方向に転回しなかつた。即ち彼の消息を更に見てゆくならば

「抑当御院家之領所依地願入部押坊之由承候、返々歎存候、其上当年者諸国平均之損亡候之上者寺領等も不甲斐ノ候歟、就是非歎入候、明印房退出之後、行阿マ出候之由承候、致煩輩等皆以如此候之向、一円御興行自出候、私へ有御状寺細坊主致一見候了、今年しも方々難治候事返々歎入候之由被申候、如形之首縁も不能計申候事於身も無面目候、且当寺へ或兼日存知事候歟、今年も南東一向飢へ以下々」

この史料は東禪寺であるとは云えないが地頭入部押坊、諸国平均の損亡、寺領経営の不安定、南東の飢饉等をなげいているがこの状態が更に悪化した挙句

「此土橋東禪寺本領、是令相違候、不断生食候間、僧衆難止住、尋分令退散候、恒例之布薩難相統、又談義興法令廟如候、佛殿僧坊已下悉難破損候、不能修復候間、可有御覽察候、然本願口懸難之御素懐、如今者令違候、一身之愁傷無極次第、獨御意無相違令執申給者、可爲莫太御

利益候、偏奉導入候茂、且者、更無他總計候」という歎きを兎るに至る。

寺領を失い、経済的保証がなければ僧達も止まり得なかつたであらうし、談義等の教養活動も行われなくなり次第に佛殿、僧房等も朽ちるにまかせ修復さえできなくなるほどおとろえていった。その後東禪寺の状態は十五世紀足利時代に存続して相当の規模であつたらしいがそれも千葉氏の滅亡迄であり、單なる田舎寺としてその後細々と継続したものと想われる。近年荻野博士が現地を調査されて現存していることを確かめられている。

教養活動は所領を有力な足場として次第に発展をしてゆくことは今迄述べてきたところであるが、換言すれば所領の維持経営が困難になり足場を奪われては好むと好まざるとにか、わらず活動範囲を制限され、一方動乱による寺領経営維持の困難のため次第に経済的困窮の招来、寺領の放棄、寺領内その他末寺との交流の疎遠等が株名寺の地方文化普及の束光をくもらせるものとなつたのであり株名寺自身の没落でもあつた。

55. 註と参照

56. 三六〇八 兩名書狀編

57. 五三四六、五四七二、五五六七、五五七一、

五五八五、五五八六、五五八九、五五九三、

五六三〇、五六六八

58. 九三四、一一四五、三五八四、八八三、

59. 楠田良洪氏密教論叢抄号に引用、小笠原氏前

掲書

60. 以下は小笠原氏前掲論文の精細な内容を一応

整理したものであり、本稿の意圖するところ

に添うようにすゝめたもので特別な他は史料

引用は省略した。

61. 四二八九、小笠原氏「中世の東京湾」史観四

七

62. 四六五六

63. 五四二七

64. 五五八四

65. 五五九〇

66. 五六三九

67. 註五四

68. 四七二五

69. 二一七六、唯宗書狀

畏令申候

抑、御佛事参慶候口、

御祈禱中に候之回不参候、

歡存候、兼又、上總一宮庄家達、肩憂戒被上候

之由承候、貴寺土橋自出事に候へは、可有御振

候敷、極樂寺までは尚以庄家煩繁又候、縁者庄

家共少々上候由承候、

猶々能様可有御計候、以此旨可有御申候、恐惶

謹言

十一月九日 唯宗（花押）

證也御房

四九一四 氏名未詳書狀

畏令言上候

抑、自一宮庄寺狀進上候、彼房主より申候は、

畏者等渡海難如之上、重病之沙弥尼も候間、旁

以難叶候由被申候、不苦候者雲富へ御狀給候て、

畏者を進慶候、此旨愚身参上仕候て、可申入候

之由被申候へども、此深泥に（以下欠）

70 寶達人民「円覺寺領にのいて」東洋大學紀要

十一、

71 庄園志料下巻下總園下川部庄策所收

72 五二九七

73 五四〇五 金沢貞科寄進狀

74 長樂寺鐘銘の拓影字直は牧野博士前掲論文に

掲載

75 五四四五

76 五四二三

77 五二四九

78 貞顯書狀二五、武將書狀編

79 八七五 僧侶書狀編

80 五五三三 実直僧歴

二 宸愛戒寺名慈恩寺

夏蔵四十八
年七十九

当寺授住三十五
年九

円寂 七月一日午刻初令

「結縁汀新草」與書によると直源の自筆本を

実直が書が書写している。

81 四四九

沙弥聖庵右馬助寛宗連署寄進狀

寄進 武州金沢大宮院称名寺
末寺

下總園大須賀保柴村内田志町

在家寺守德四并奈土郷内下房

别当后等後別以別儀
寄附仕候畢

右、彼所者爲院家領永代所奉寄進之也

子孫末葉等更不可毀遺乱、若於後日違此儀子孫

等者、爲不孝仁、不可知行聖庵跡者也、於公方

可被召安増狀、仍寄附之狀如件、

應安四年四月十五日

沙弥聖庵（花押）

右馬助寛宗（花押）

82 五五七〇

83 識語編二一三

84 識語編五三七

85 一八四四

86 一八六八

おわりに

金沢文庫の存続を時代的背景を念頭に入れてその意義をとらえることが目的であるが結果としては株名寺の製塩活動の解明ということになったが金沢文庫と株名寺との実体に多くの問題性があるため両者及び金沢学校という広い意味で考えてみた。夫々の明確な性格の問題については今後の研究の課題としてゆくつもりである。

先学各位の御批判、御叱正をいただければ幸いです。

附記 本稿は昭和三十五年度弘前大学国史研究会大会に口頭発表したものを加筆訂正したものである。